九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[41]文學研究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2339120

出版情報：文學研究. 41, 1951-03-10. The Kyushu Literary Society
バージョン：
権利関係：

彙報

杉浦正一郎助教授

前北海道大学杉浦正一郎助教授は昭和二十五年十月三十一日付を以て本学文学部助教授となられ国文学を講ぜられることとなつた。

九州文学会談話会

ボワローの諷刺詩について　進藤誠一教授

昭和二十六年二月三日　於小会議室

九州大学文学部文学関係講義題目

昭和二十五年度第二学期

（自昭和二十五年十一月　至昭和二十六年三月）

國文學・國語學

国文学特講　杉浦助教授

西鶴「世間胸算用」（演習）　〃

伊勢物語（演習）　福田教授

国語学概説　〃

万葉集　巻十四（演習）　〃

中國文學

唐代文学史　目加田教授

儒林外史（演習）　〃

英文學・英語學

英文学概論　中山教授

Shakespeare: Othello（演習1）　〃

Ruskin と Morris（演習2）　〃

英国十九世紀英文学史　前川助教授

R. Browning's Poems（演習3）　〃

Hazlitt, Selections from Hazlitt's Essays（演習4）　〃

英文学　大塚講師

佛文學

ラシーヌ研究　進藤教授

シャルル・ヴィルドラック「ル・バックボー・テナシティイ」（講読）　〃

パスカル「パンセ」（演習）　〃

仏文学演習　永田助教授

デイドロ「ルリジューズ」（講読）　佐藤講師

彙報

獨文學

独語学概説	高橋助教授
独文学講読	〃
トーマス・マン（演習）	〃
独文学	国松教授
独文学演習	〃
ハインリッヒクライスト（演習）	秋山講師
Das Katchen von Heilbronn	〃

言語學

言語学概論	吉町助教授

古代語

ギリシヤ語初歩（White First Greek Boo）	長沢教授
ギリシヤ語	〃
ラテン語初歩	デロリエ講師

外國語

英語 De Quincey Confessions of an opium Eater	前川助教授
英語（ニューズウィーク）	森岡講師
仏語 G.Sand la mare an diable	永田助教授
仏語初歩（ゴーチェ短編集）	〃
独語初歩	栗原講師
露語	吉町助教授
露語初歩	〃
中国語（新中国小説集）魚返善雄著	影山講師
中国語初歩（華語基礎読本）魚返善雄著	〃

九大国文学会

昭和二十五年度後半期

國文學會例會（二十五年十二月十日）

於第七演習室

研究題目及び発表者

一、謡曲「羽衣」の構成 ——竹取物語考察の準備として—— 村田正志

一、堤中納言物語の写実性 大原一輝

一、義太夫文学の家庭相 清田正喜

一、「らむ」「らし」について 秋山正次

一、合作浄瑠璃作者考 横山正

一、詞性と辞性について 黒岩駒男

一、西行の自然感情 瀬古確

春日博士學士院會員記念祝賀會（十二月十日）

於三長閣

本会名誉会長春日政治先生には、この度学士院会員となられ

たので、記念の祝賀会が催され、先生のお教を受けた者が多数集つてお祝ひし、盛会であつた。

杉浦助教授歓迎會（十二月十二日）　於三畏閣

卒業論文發表會（二十六年二月四日）　於第七演習室

研究題目及び発表者

一、方丈記の一考察　春山要子
一、正岡子規の俳論とその俳句　今元禎三
一、葛西善藏論　長沢史郎

特別研究発表題目及び発表者

一、所謂「金葉和歌集初度本」の伝来と性質とについて　石井和男
一、奥の細道尾花沢四句考　清田正喜

予錢會（二月四日）　於三畏閣

国語学会

第四回公開講演會（二十五年十一月二十五日）　於法文第八番教室

講演題目及び講演者

一、万葉集及び古今・新古今の恋歌を素材としての言語心理学的一研究　秋重義治
一、注音符号について　目加田誠

春日博士學士院會員記念祝賀會（十一月二十五日）　於翠泉

時枝博士歓迎會（二十六年一月十二日）　於工学部食堂

第五回公開講演會及び座談會　於縣立福岡高校講堂

講演題目及び講演者

一、国語学と国語教育　時枝誠記

中国語文学会

西日本中国語文学会創立総会及び第一回研究発表会が、一月十三日（土）午前十時より九州大学文学部に於て開催された。席上会の運営に対する種々の協議がなされたが、特に中国語学の研究を中心として年二回の大会開催、会誌の発行、代表者として九州大学目加田教授を推すことなどが決定された。なほ当日席上左の如き研究発表がなされた。

現代標準語の名詞について　九州大学　邢須清

中国新劇発展途上に於ける旧劇の抵抗について　九州大学　浜一衛

日本英文学会第三回九州大会

昭和二十五年十月二十八日(土)、二十九日(日)の両日に亘り、九大第一分校に於て開催された。大会参加者は遠く関東に及び、三十氏の多彩な研究発表が行われ、終始活潑な質疑応答が交わされた。本大会の次第は次の通り。

開会の辞　日本英文学会評議員　中山竹三郎

研究発表

第一日(第一会場)

1、The Irish Melodies; 一つの覚書　福岡学芸大学　吉竹迪夫

2、ブラウニングの詩作に於ける根本的態度　甲陽学院高校　三谷正

3、Virginia Woolf の Imageries　西南学院大学　石井康一

4、叙事詩「ベオーウルフ」に於ける異教思想とキリスト思想　熊本短期大学　辰宮栄

5、シンクレア・ルイスの近作　神戸経済大学　荻野目博道

(第二会場)

6、ジェイン・オースティンに就いて　西南学院短期大学　山崎春雄

7、精神分析学と文学　山口大学　吉武博

8、マーク・トウェインの厭世思想　千葉大学　小松光

9、"Lucy Poems" より "Vaudracour and Julia" に至る Wordsworth の恋愛詩　熊本大学　田崎篤次郎

10、英語散文文体　広島大学　東田千秋

第二日(第一会場)

11、Teufelsdröckh の回心　九大第二分校　田中大作

12、On Reciting English Poetry　千葉大学　吉松勉

13、"The End of Chapter" に就いて　山口大学　小西邦太郎

14、J・M・シングの劇に於ける悲劇性　福岡女子大学　中島源治

15、Edward II and Richard II　熊本大学　和田勇一

午后の部

16、J. Galsworthy as a Playwright　島根大学　吉岡寅之助

17、Laurence Sterne について　九大第三分校　森岡栄

18、Sir Thomas More as a Humanist　久留米大学　彌永勝太

19、「ハムレット」と虞美人草　北九州外国語大学　山内隆治

20、Shakespeare の喜劇的手法　西南学院大学　坂本重武

（第二会場）

21、動詞 "put" の研究　大淀高校　島田平一

22、英語構造型の研究　西南女学院　加藤義之

23、Shakespeare の言語に用いられた "Shall" について　小倉外事　池辺義男

24、Rhyme-word を中心とする Chaucer の統語法　広島大学　桝井迪夫

25、The Genius of the Japanese Language, compared with English　神戸商大　三戸雄一

午后の部

26、Caxton の英語　九大第三分校　長沢由次郎

27、「モラリティ」について　九大第一分校　井坂清

28、壮年期のホーソン　九大第三分校　多久和新爾

29、Some Peculiarities of American English　九州工業大学　待鳥又喜

30、Shakespeare, peeped at from the back-door　九大第一分校　茗荷幸也

閉会の辞　九大教養部教授　後藤武士

尚本大会に於て日本英文学会九州支部が結成され、支部長に中山教授を推し、事務所を九大文学部西洋文学研究室内に置く事になつた。

G・S・フレーザー氏特別講演

（一月十六日―二十日　番　教　室）

エドマンド・ブランデン氏の後任として来朝した英国文化使節、G・S・フレーザー氏はかねてから折衝中の中山教授の招きに応じて一月十六日来福、同日より二十日迄五日間に亘り英文学の特別講義を行つた。英本国に於て少壮中堅の詩人、批評家として活躍していた氏が熱情こめて論ずる現代英文学は清新

の気に溢れ、聽講者に多大の示唆と感銘を与えた。

氏の講義題目は次の通り。

一、Modern English Poetry.

二、English Novels and Poems as a Record of Social Change.

三、T.S.Eliot; Introductory Lecture.

尚二十日午后一時より十一番教室に於て、Lite and Literature in England To-day と題する公開講演が行われた。

○ 佛文學臨時講義

京大桑原武夫教授は、「ルソー研究」の題目の下に、九月二十五日より二十九日まで臨時講義をされた。

桑原教授歓迎會（九月二十九日）

講義終了後三畏閣に於て歓迎会を開く。進藤教授はじめ永田、佐藤、石、城野の諸先生、及び全專攻学生参会、同教授を囲んで賑やかな歓談の一夕を過した。

日本　フランス文學會秋季総會（十一月二十五日）

日本フランス文学会秋季総会は京都日仏学館に於て全国各大学よりの参加の下に盛大に挙行された。本学よりは進藤教授はじめ永田、石、城野の諸先生及び弓削研究生が出席した。研究発表会に引き続き総会、懇談会が開かれ、席上仏文学会の全国的な組織の確立が決議された。尚次回は五月頃東京に於て開催の予定。

九州大学文学部文学関係

昭和二十六年三月卒業生論文題目

一、子規の俳論と其の俳句　今元禎三

一、葛西善藏論　長沢史郎

一、方丈記についての一考察　春山要子

一、ボーの詩觀研究　山地正彦

一、ロバートブラァウニンの研究　小野粹

一、初期に於けるジョン・ゴールズウァージィの戯典の研究　荒木健悟

一、オスカーワイルドその芸術論の発展　大森衛

一、シェクスピヤ・四大悲劇の劇的乃至は悲劇的性格に就いて　上妻正春

一、ウィリアムブレイクの「無心と経驗の歌」について　田所信成

一、ハムレット論　田中輝人
一、ヂェイン・オースティンの芸術の世界　永島計次
一、ワァヅワァスに就いて　福田国男
一、詩人としてのD・G・ロゼッティ　福田卓平
一、ヘンリー・ウァズワス・ロングフェロー
——ニュー・イングランド文芸復興の一様相——　元田脩一
一、ボードレール研究　岡隆
一、モリエール研究　吉村直治
一、トーマス・マンの「魔の山」について　空井義観
一、ゲーテの方法に就いて　神崎義一

受贈雑誌

民間伝承（民間伝承の会）
経済月報（大阪銀行調査部）
人文学（同志社大学人文学会）
国語・国文（京都大学国文学会）
哲学研究（京都哲学会）
天の川（天の川会）
説林（立命館文学会）
天理大学学報（天理大学人文学会）
一橋論叢（一橋論叢編輯所）
心理学研究（日本心理学会）
立命館文学（立命館研究所）
読書春秋（国立国会図書館）
人文研究（大阪市立大学文学会）
文化（東北大学文学会）
收書通報（国立国会図書館）
山形大学紀要（山形大学人文科学会）
人文論究（北大学芸大学函館人文学会）
国文学研究（早稲田大学国文学会）
舵輪（天の川会）
商大論集（神戸商科大学）
日本文学論究（国学院大学国文学会）
国内出版物目録（国立国会図書館）

文学研究筆者別索引

（筆者はABC順による。）
（括弧内は輯号を示す。）

千代正一郎

独逸的なるもの（三三）

福田良輔

奈良朝時代東国方言の成立について（上）（中）（下）（三七・三八・四〇）

春日政治

片仮名交り文の起源について（一）
古訓漫談（二）
「小学言義」より（四）
「高野山方言講義」より（四）
宇治拾遺物語の一本（九）
金光明最勝王経註一本の古点について（一四）
法王帝説（二）
聖語藏御本（三）
古訓語彙（三）
一八五〇年和訳馬太伝（三六）

片山正雄

文学科学概説（一）

國松孝二

愛と憎しみ「ニーチェと古典文学」の一章（三五）
運命への目覚め（三六）
ドイツからの脱出――ニーチェの個人主義の基底について――（三八）
ゲーテの革命劇をめぐつて（三九）
ニーチェについて（四〇）

小島吉雄

明治初期の歌論（一）
宗祇晩年の歌（二）
新古今和歌集の選態度と選集事業（五）
所謂石津本古今和歌集に就いて（八）
連歌新集風の美的情調（一・一二）
今集歌風と註釈（一八）
春日博士所藏二十一代集中の新古今和歌集に就いて（二三）
後鳥院の御文学（二五）
新古今集写本考（三〇）
新古今集に於ける選者名の頭書に就いて（二八）
わが国近世悲劇（三三）
見るひとの運命（三四）
池袋清風の訳詩（三五）
芭蕉奥道の細道覚書（三七）
「みだれ髪」を論ずの句について（一）（二）（三八・三九）（四〇）

小牧健夫

ヘルデルリーンのエトナ劇断片（二）
クライストの「公子ホンブルク」の一問題（六・八）
銀の鈴（一一）ゲーテの従軍記（一五）
ヘルデルリーンの半神観（二二・二四・二六）
榮花行（二三）
クライスト随想（二八）
独逸浪漫主義の諸問題（三〇・三二）
正岡子規とレッシング（三三）
西芳寺の庭（三五）
われもまたアルカディアに（三六）
砂に書く（四〇）

小室光弘

土と文芸（三三）

前川俊一

ワーズワースのソールズベリーテインターン旅行（三七）
ワーズワースに於ける自然観の進展（三八）
ワーズワース「辺境の徒について」（上）（四〇）

松枝茂夫

鏡花縁の話―異国廻りを中心として（二六）
蝶奄居士張岱（二八）
荣天寥とその一家（三〇）
醒世姻縁伝の話（三二）
郝蘭皐の随筆（三三）
児女英雄伝の面白さ（三四）
金聖英の水滸伝（三五）

森永隆

謝恩（三三）

目加田誠

塡詞選釈（一三）、民国以来中国新文学（一四）
雅に於ける天寶（二〇）
白樂天の諷諭詩（二三）
邪詩考（二五）
陳詩経に詠れた自然界（二八）
春秋の断章賦詩に就いて（三一）
陳磧甫（二九）
文心雕龍（三三）
洛神賦（三六）
六朝文芸に於ける「神」「気」の問題（三七）
李笠翁の戯曲（三九）

永田英一

ヴィニーの哲学詩について（三三）
アンドレ・ミエ（詩人と市民）（三五）
スタール夫人「ルソーについての書簡」（三六）
スタール「マルゼルブ氏への書簡」（三八）
スタール夫人「ルソーについての書簡」（四〇）

中山竹二郎

「貧者の友」ウィリアム・ラングランド（一）
イギリス中世の宗教劇（五）
イギリス古劇の詩形について（九）
チョウサアと現代英語（一九）（一三）
散文韻律について（二一）
チョウサアに於ける措辞的特徴について（二二）
ウエイクリの英訳「源氏物語」（二三）
チョウサアその生涯と性格（二七）
キャンタベリ巡礼の世界（三〇）
チョウサアの二面性（三三）
「サー・ガウエインと緑の騎士」について（三四）
メリデイスの詩について（三五）
ソチオウロウその生活観（三七）
「トロイルとクリセイデ」（三六）
英文学と貧困（三八）
ウイクリフ宗教劇の世俗化（三九）
「第二の羊飼の段」（試訳）（四〇）

成瀬正一

十八世紀に於ける文芸サロン（二・三）
新旧両派の文芸論争（七）
モンテーニュと東洋の悟道（一六）
旅行報告書（一六）

野上豊一郎

杉田玄白とその周囲の人達（一九）
使徒啓見（三五）

小野島行忍

サツカ・バンハ・スツタンタ（三）
リツ・サンハーラ（一〇・一一・一三）
訳梵漫語（二三）
梵詩メーガ・ヅータ散文訳（二八・二九・三一）
草枕そぞろごと（三三）
梵語奈留別誌（三四・三六）

笹月清美

天平八年の遣新羅使一行の歌（一三）
古事記の文芸的性質に類する認識の発表（一七）
文芸活動の機構（二一）
本居宣長における道と文芸（二五）
語意考の成立過程を示す二・三の伝本について（二六）
小林居宣長の国語研究（二九）
富士谷御城のテニヲハ説（三一）
夕顔杖の言語理論について（三三）

佐藤通次

世界の劇歌（四）
雅性とゲーテの「ファスト」（一）
生の悲極性（八・九）
「思ふ」と「考へる」（一〇）
数・生・格と体験（一四・一六・一七）
創世神話と老と親（二一）
「生む」と「見る」と「生」（二九）
「超生の論理的構造」（二五）
「二の事行的解放」（二七）
文芸現象契機「見る」と「生む」と「研究に寄せて」（三一）
歴史の志向「アウスト」研究の一齣（三三）
創刊の頃（四〇）

進藤誠一

「フイガロの結婚」とボーマルシエー（一）
ユージエーヌ・ラビツシの喜劇（六）
スクリーブの功罪（八・九・一一）
コメデイー・フランセーズの沿革（一四・一五）
十九世紀中葉以後に於ける仏蘭西風俗劇（一八・二五）
日本に於けるコメデイー・フランセーズ（二三）
モリエールの結婚（二七）
フリヴオーの覚書（二九）
「ブリタニクユス」に於けるイタリア人劇団の業績（三二・三四）
作者兼俳優（三五）
フランスの喜劇（三六）
フランスの最古の芸風について（ノート）（三九）
マダム・ロングヴイルの生涯（四〇）

高木市之助

吉野の鮎（二七）
国見（三〇）
牡丹放（三三）
玉芳（三五）
島川媛（三六）
仙放（三五）
酒供養（三六）
思出十年—私本位に書きつゞるところの—（四〇）

田中晃

表現の構造（一六）
万葉歌人の国家思想（一八）
行為と哲学（二〇）
日本的現実主義と「ものゝあはれ」（二三）
生成の根拠としての自然（二五）

豊田實

日本に於けるシェクスピア紹介の歴史（一）
英吉利漂流邦訳考（四）

芥川龍之助とエドガ・アラン・ポオ（七）
基督教聖書の歴史（一二）
和訳「英文小学読本」（一二）
故坪内博士の日本とシェクスピア（一六）
日本に於ける英文法紹介及び研究の歴史（二〇）
俳句と英詩（二三）
生活、文化の反映としての英語史緒言の一節（二六）
言語起源の問題―英語史「第一部概観」の緒論―（二九）
日英語音通じて見る英人祖先の生活―大陸時代―（三一）
人及び国民性（三三）
シェイクスピアの女性観（三六）

山内晋郷

六朝時代の展望（二）
牟子問題の清算（四・五・六）
王鳴盛氏の仏典観（二）

矢田部達郎

古語に於ける「てには」の意義（三二）

吉町義雄

「物類称呼」西国方言索引（一）
九州方言の特異性（二・三・五）
島津斉彬の「ローマ字日記」と長田穂積の「菊池俗言考」（七）
博多仁和加用語に現れた活用一段化趨勢（一〇）
日本語動詞現在時形態論（一五・一七・一九・二二・二四・二六）
九州方言四段変格活用動詞分布相（二三）
紫雲山人鹿児島方言文学四書抄（二八）
施福多「日本文庫及び日本文学研究提要」（三〇・三二）
堺都創刊日本語辞書（三三）
大和口上言葉集（三四）
上海刊行日本語文典（三五）
九州方言推量・打消助動詞活用分布相（三六）
「日本風俗備考」蘭日会話（三七）
九州方言指定・比況助動詞活用分布相（三八）
対馬字引「日暮芥草」府中語抄（四〇）

「文学研究」発行年月一覧表

第一輯	昭和七年三月	第廿一輯	昭和十二年十一月
第二輯	昭和七年十月	第廿二輯	昭和十三年三月
第三輯	昭和八年二月	第廿三輯	昭和十三年十月
第四輯	昭和八年三月	第廿四輯	昭和十三年十二月
第五輯	昭和八年七月	第廿五輯	昭和十四年六月
第六輯	昭和八年十月	第廿六輯	昭和十四年十二月
第七輯	昭和九年一月	第廿七輯	昭和十五年七月
第八輯	昭和九年五月	第廿八輯	昭和十六年三月
第九輯	昭和九年十月	第廿九輯	昭和十六年八月
第十輯	昭和九年十月	第卅輯	昭和十六年十二月
第十一輯	昭和十年四月	第卅一輯	昭和十七年六月
第十二輯	昭和十年七月	第卅二輯	昭和十七年十二月
第十三輯	昭和十年十月	第卅三輯	昭和十八年十二月
第十四輯	昭和十年十二月	第卅四輯	昭和二十年三月
第十五輯	昭和十一年四月	第卅五輯	昭和廿一年三月
第十六輯	昭和十一年七月	第卅六輯	昭和廿三年三月
第十七輯	昭和十一年十月	第卅七輯	昭和廿三年十二月
第十八輯	昭和十一年十二月	第卅八輯	昭和廿四年十二月
第十九輯	昭和十二年五月	第卅九輯	昭和廿五年三月
第廿輯	昭和十二年十月	第四十輯	昭和廿五年十一月